

付章 1

土壙墓の調査 ―豊前京都郡発見の木蓋土壙と無蓋土壙―（再録）

小田富士雄

序（第1図参照）

ここに報告する土壙墓は、昭和30年（1955）5月、福岡県行橋市大字延永（旧京都郡延永村）字琵琶隈に発見された竪穴式石室古墳調査の副次的発見遺跡であり、本報文も同古墳報告の附録として作成したものであるが、単独でも支障ないと考え紹介することとする。

今回竪穴式石室古墳の調査に際し、筆者は第二区の封土築成状況の調査を担当して、第三区との境界に沿うトレンチを掘ったが、偶々人夫の鍬先に木板状の炭化せる土塊があったのに注意し、これを追求露出して土壙の存在を確認し、更にこの南に隣接する一例の土壙を発見した。前者を一号、後者を二号と称して記述する。

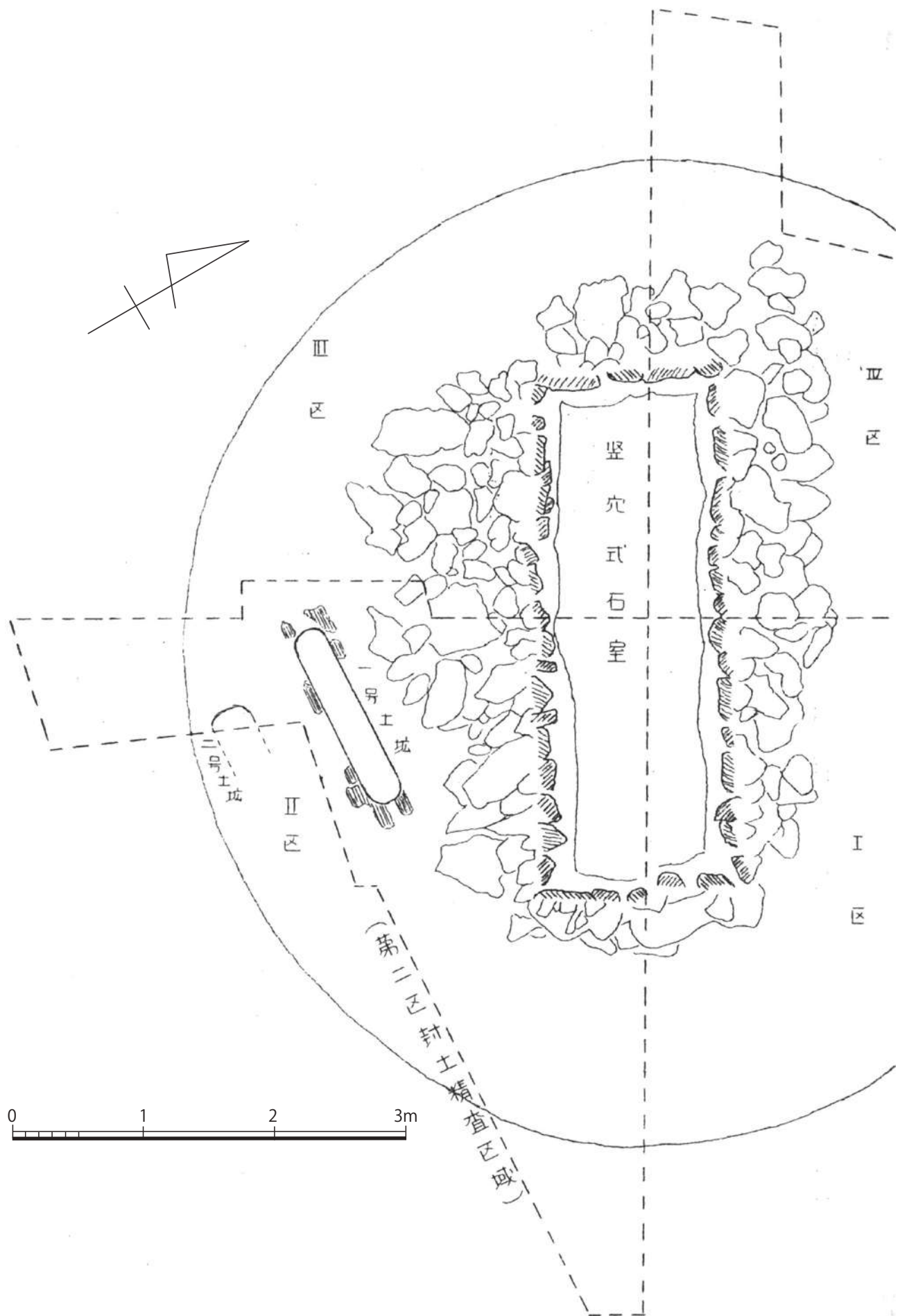
一、石室と土壙墓の関係（第2図参照）

第三層との境界に於て封土断面の観察を行った結果、四層に区分し得た。乃ち第一層は黒色を呈する薄い最上層で経塚を包含する。第二層は赤色を呈し、一号土壙上で1 m 30cmの厚さに及び、その下に赤黒色の第三層が現れ、この層は土壙に直結する。第三層下は赤色地山（第四層）で、土壙はここに営まれる。一号土壙底面より第一層表面まで1 m 90cmに達し、二号土壙は一号より更に60cm下る。従って石室基底面とさして大差ない高さを占めており、一号土壙の如きは石室内南壁と1 m 30cmを隔てるにすぎないから、石室築造時の土壙や石室外部の石組などによって破壊される公算は非常に大きく、辛うじて湮滅を免れたものである。それでも一号土壙北壁沿いの炭化材は石室の組石によって一部遮断されていた。

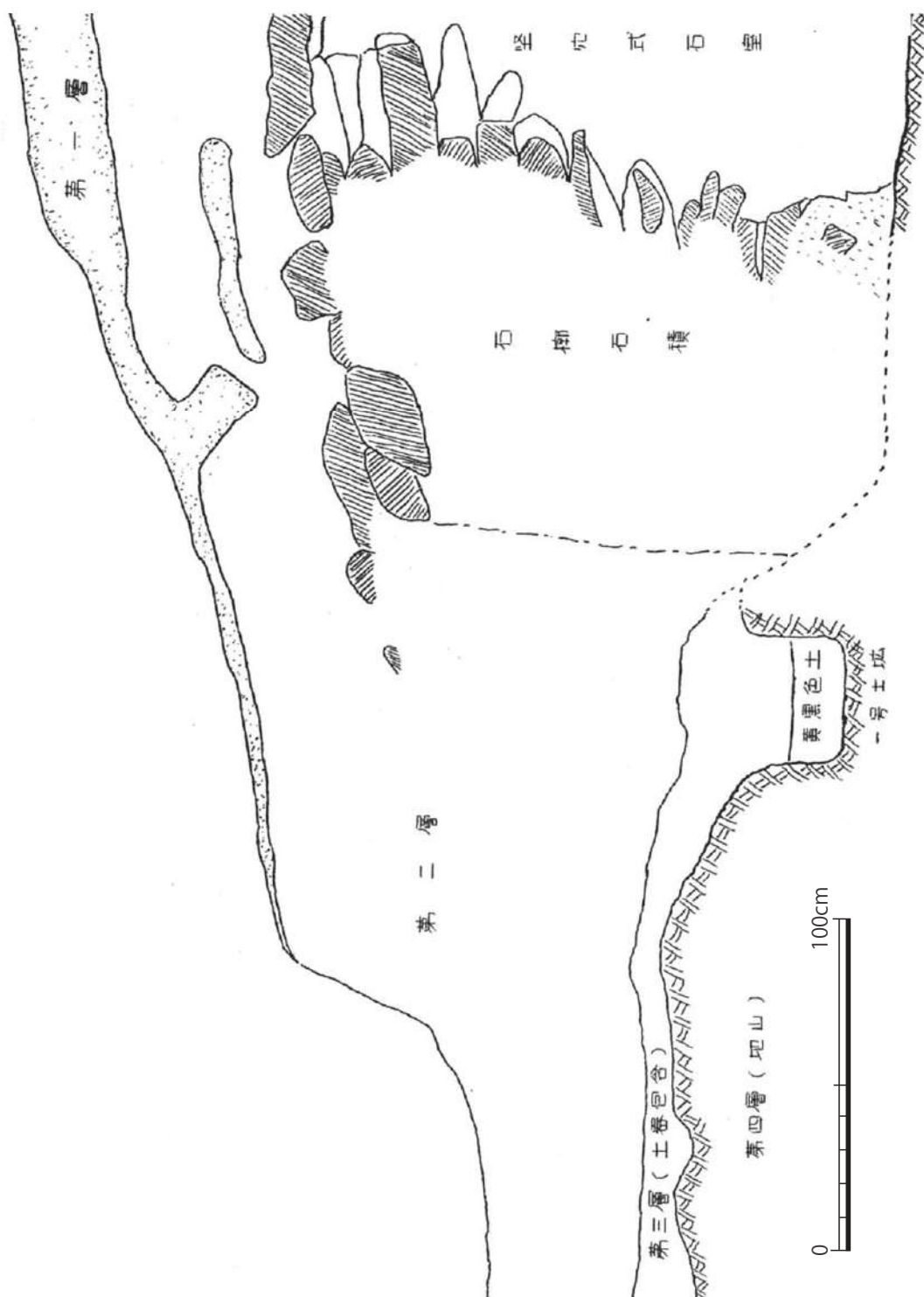
さて、土壙墓と石室古墳の関係を考えるに、第三層は一号土壙の中程迄入っており、他方地山（第四層）を直接覆うている。而るに第二層は石室外部の石組に近接した所で、第三層を中断して急傾斜を見せながら第四層内に入る。之は第一区との境界に於いても認められるから、もはや第二層は石室の封土であり、第三層を石室古墳築造前の地表とするに躊躇しない。従って土層の観察から土壙墓が石室古墳に先行することが立証されるのである。

二、土壙墓の構造（第3図参照）

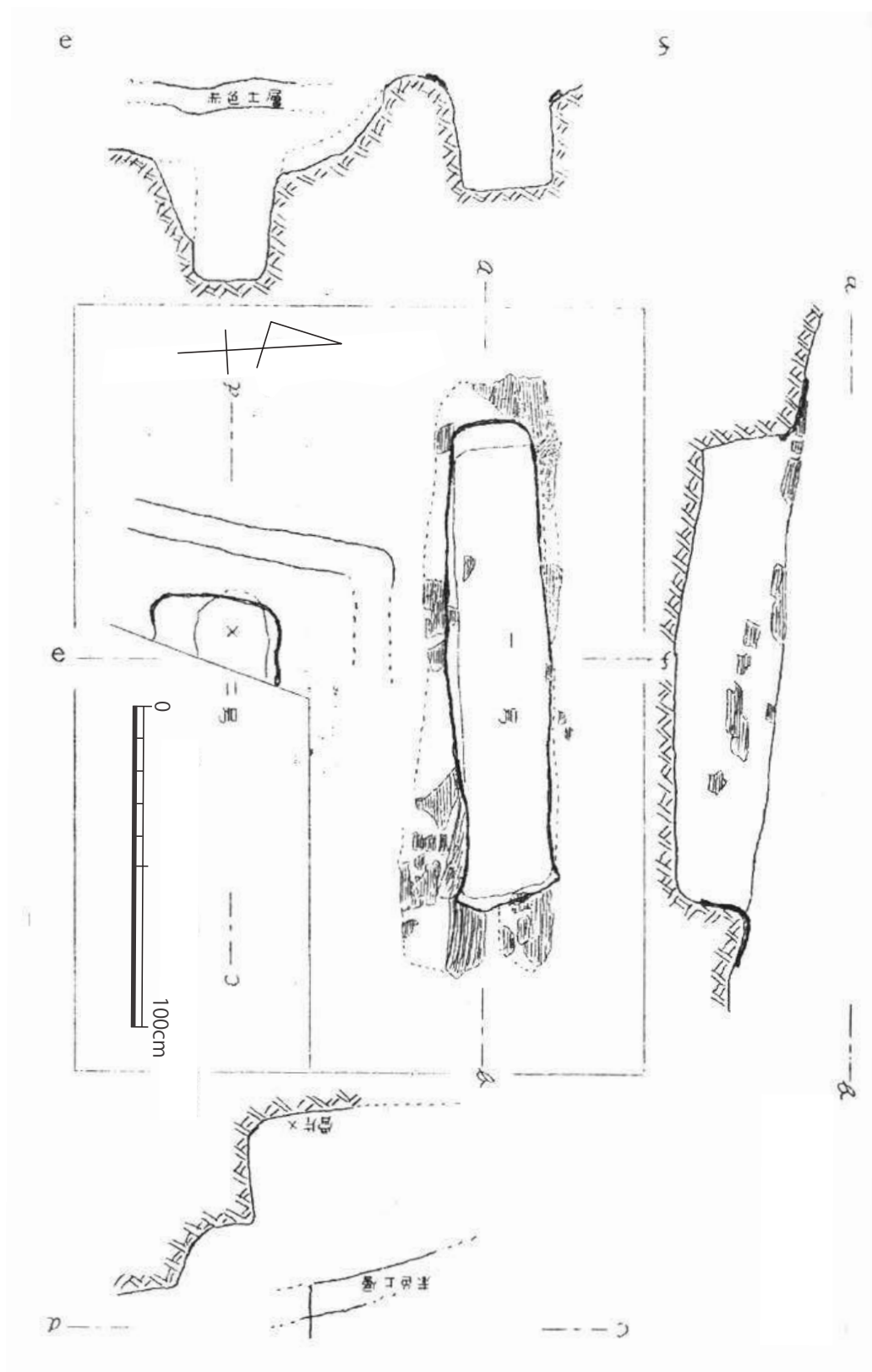
〔一号土壙〕主軸は東西で全長1 m 50cm、幅30cm、深さは一様でなく中央より東及び西に向うにつれて浅くなるが、中央で30cm、東西両端では20～25cmを示す。壙形は明らかに箱形と云うべく、東西両壁は上開きの立上りを見せ、南北両壁は凡垂直である。但し、南壁上部はいくらか壊れている。この土壙で注目すべきは壙壁の内外両面に沿って木板状の炭化材がかなりの量発見されたことである。南壁及び西壁沿いの木材は人夫の鍬によって中断されはしたものの、原形をうかがうには支障ない。これは木板繊維が全て壙の主軸に平行することと合せて壙蓋設備をなしていたとみてよかろう。而して東及び西壁に於ける



第1図 石室と土墳墓の関係（平面配置図）（1/40）



第2図 石室と土墳墓の関係 (地層断面図) (1/20)



第3図 土墳墓実測図 (1/20)

炭化材繊維の観察から、少なくとも二枚以上の木板を使用したと思われる。またこの炭化材は墳壁内面にも附着し、やはり繊維が墳の主軸に平行する。しかもそれは壁面上半部に限られる。そこで南北両壁内面に附着する炭化材の幅を合せると、墳の幅に一致することとなり、これも墳蓋とする解釈に有力な証差を与えるものである。而らば墳蓋材が壁内面に附着するのは如何なる理由によるであろうか。ここで前項で記した第三層が墳内上半部を充鎮する事実を想起すれば、墳墓上を覆うこの土層が蓋を破って侵入した際、土圧によって壁面に密着したものであると解されよう。更に墳下半部は黄黒色の細粒土が充満するが、精選されたような細粒土であるから、間隙より流入したと解されぬでもないが、第三層と異なる点に注意して、遺体収容後、この細粒土で墳の間隙を埋め、蓋をしたものとする。この土層はその寸法に照らしてみても成人を辛うじて収容しうるのであろうが、従って遺体収容後、間隙を埋めるにしても多量を要しない。以上の案に幸い大過なければ、第三層の陥入は遺体腐朽によって生じた空隙の結果であるとする事も出来よう。ともあれ一種の木蓋土層ともいふべきものの实例を得たことは、その遺存し難い性質上からも貴重な例と云わねばならない。なお本例の如き明確な箱形墳はこの地方では稀例であることを附記しておく。

〔二号土層〕 一号の南 50cm を隔てて主軸を同じくするが、墳の位置が一号より更に 30cm 東寄りである。しかしこの土層の全形はトレンチの外にかかるものであるから、限られた調査日数で全形を現わすことは、今回の調査の大綱を不鮮明にすることを考慮して、トレンチにかかった部分のみを調査するにとどめた。この土層上には弥生式土器片や、古式土師の高坏片を包含するが、全て第三層に属する。土層の全長はわからぬが、墳幅は底面で 25cm、深さは上部を破壊されたが、30cm 強である。南北両壁は上開き、西壁は垂直よりも稍上すばみの傾向ある点が一号と対比して注意される。床面からは頭蓋底骨片が検出され、頭位が西に当ることも察せられる。この土層で注意したいのは蓋の構造についてである。乃ち、一号の如く蓋の材料を遺存するのではないが、墳底の上方 50cm に厚さ 10cm の短い赤色土層帯が認められ、それは土層上に限られて、両端を第三層と区別することは出来ない。この部分的な土層は地山と全く同性質のものであって、第三層中に含まれたような外観を呈する。これは土層を営んだ際、掘出した地山の土で、遺体収容後、墳内に発見される黄黒色土で間隙を埋めた後、墳上を覆うに用いたものとする。この土層帯下に第三層をみるのは、後に第三層が流入して境界を不明瞭ならしめたと考えるのが穏当であろう。かくて特に蓋という程の設備は認められないのであるが、木蓋の如き設備をもつものが湮滅したとするには、近接した一号土層で炭化材を多く遺存する以上、本例のみに特別の消失する原因を考えるのはむしろ不自然であらねばならぬ。結局当初より無蓋であったと考えてよからう。

【補記】

本稿は昭和 31 年（1956）九州大学文学部国史学研究会発行『九州史学』創刊号に発表されたもので、原本はプリント印刷版であった。再録するにあたり、考察（三、豊前における土層墓考論）を省略して報告部分のみ再録し、図面類は当初の雰囲気のをこすべく、そのまま再録した（当時はまだコピー機なども未見であったから）。なお原本は本文縦書で漢数字記載であったが、今回横書にするに際してローマ数字に改めた。（小田）